ハムと卵と風景 ：
トウェインの食の風景をエコクリティカルに読む

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-11-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38452

特集◘Is Mark Twain Dead?――マーク・トウェインの文学的遺産［日本アメリカ文学会シンポジウム］

「ハムと卵と風景」◘トウェインの食の風景をエコクリティカルに読む

結城正美 YUKI Masami

1■トウェインとグレートベイスン

マーク・トウェインと環境文学の接点は――それがあるとすれば――どのあたりに求められるのだろうか。エコクリティシズムの分野でトウェインの作品が論じられたり言及されたりすることはあるが、その場合、たとえば *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* を件のカエルが絶滅危惧種であったということから動物虐待の物語として読み直すという具合に（Shein）、トウェイン作品の反エコロジカルな側面が指摘される向きがある。しかし、小論に与えられた課題は、批判の対象としてではなく文学的遺産としてのトウェインの足跡をエコクリティシズムのアプローチから検討することにある。エコクリティシズムにおけるトウェインの文学的遺産があるとすれば、どのあたりに目星をつければよいのだろうか。ひとつにはネヴァダというトポスが考えられる。ネヴァダはサミュエル・クレメンズが「マーク・トウェイン」として筆をとり始めた、すなわち作家トウェインが誕生した地である一方、一九九〇年代半ば以降環境文学研究のメッカとして知られる場所でもある。ネヴァダ、あるいはもっと広く、ネヴァダ州の大半が含まれる合衆国最大の荒野グレートベイスンに着目することで、トウェインとエコクリティシズムの関連がみえてくるのではないか――この小論はそのような予感に導かれるかたちでトウェインの作品をエコクリティカルに読むことを試みるものである。

文学的トポスとしてのグレートベイスンに目を向ける前に、まずグレートベイスンの地誌を概観しておきたい。グレートベイスンは、その名が示すとおり巨大な盆地である。先史時代にレイク・ボヌヴィルやレイク・ラハンタンという巨大な湖を擁し、その小さな名残がそれぞれユタ州のグレートソルトレイク、ネヴァダ州のピラミッドレイクやウォーカーレイクとして現存する。いずれも流出口のない湖だ。グレートベイスンは合衆国最大の荒野で、東はユタ州のワサッチ山地（ロッキー山脈の西端）、西はカリフォルニアとネヴァダの州境近くを走るシエラネヴァダ山脈、北はコロンビア高原、南はモハベ砂漠に至る。標高が高いため比較的冷涼で、冬には降雪もみられる。ネヴァダ、ユタ、オレゴン、アイダホの各州にまたがっているが、なかでもネヴァダはその大半がグレートベイスンに含まれ、そのネヴァダの州花であるセージブラッシュをはじめとする丈が低く乾燥に強い植物が荒野を

覆っている。トウェインもこれらの植物について随所で書いており、たとえば、「セージブラッシュは並はずれて丈夫な植物」であり、荒野で得られる「良い薪」であるが、「野菜としては完全に落第」であると記している（*Roughing It* 34）。

トウェインとグレートベイスンとの関係で即座に思い起こされる作品は *Roughing It* であろう。この作品では、トウェインの兄がネヴァダ準州の秘書官に任命され、名目上はその兄の私設秘書としてトウェインがミズーリからネヴァダへ駅馬車で向かう旅の様子をはじめ、ネヴァダでの滞在、銀の採鉱で一攫千金をねらう人々の様子、その後のカリフォルニアへの旅などが描かれている。

全七九章の前半にグレートベイスンと周囲の山々の描写が散見されるが、それらは二つに大別できる。ひとつは、グレートベイスンの東端と西端にそれぞれ連なる山々の風景、すなわちワサッチ山脈やシエラネヴァダ山脈の風景で、これらは概して「荘厳で」「気高く」「魂を奪われるほど美しい」ものとして描かれている。たとえば第十七章では、グレートソルトレイクシティを発った直後に山や峡谷の「荘厳なパノラマ」に目を奪われている様子が描かれ（*Roughing It* 140）、第二十二章ではシエラネヴァダ山脈の山中にあるタホ湖畔の風景が次のように絶賛されている――「海抜六三〇〇フィートの高みに青い水をたたえた気高い湖、それを取り囲む外輪はさらに三千フィートも高くそびえる雪を冠した峰々だ！　湖は大きな楕円形で、周囲をめぐったら優に八十から百マイルはあるだろう。静かな湖面にくっきりと山影を映しだしている姿を見たとき、これは間違いなく世界中で最高に美しい一幅の絵だとわたしは思ったのだった」（*Roughing It* 169）。山は山でも、州都カーソンシティを取り囲む山は「樹木は一本も」なく「不毛」であると形容されているところをみると（*Roughing It* 157）、トウェインの目に映る荘厳な山とは樹々に覆われた緑ゆたかな山であったと考えられる。

グレートベイスンに関するもうひとつの風景は乾いた荒野に関するものである。ユタからネヴァダに広がるアルカリ性土壌の荒野やセージブラッシュに覆われた乾いた荒野は、山の場合とは対照的に、「生気がなく」、「単調で」、「忌まわしい」と形容されるのが常だ。たとえば、第十七章で山のパノラマが絶賛された直後、第十八章ではソルトレイクシティから西に延びるアルカリ荒野が言及され、それがいかに「かの凄絶で知られたサハラ砂漠をもしのぐ種類の荒野」であるかが語られる（*Roughing It* 142）。また、ネヴァダ北部に広がる〈四十マイル荒野（フォーティマイルデザート）〉――カリフォルニアゴールドラッシュの際に西へ向かった者たちが、四十マイルにわたって水がないこの地をそう呼んだ――は「巨大な墓場」（*Roughing It* 150）と称され、セージブラッシュなどの植物に覆われている場合であっても「灰をかぶったセージブラッシュが点在する陰気な荒野」と描写され、「生命の気配のない静寂」に支配されていると語られる（*Roughing It* 143）。荒野の風景に向けられた辛辣なまなざしは荒野に浮かぶ湖にも及んでおり、たとえば、シエラネヴァダ山脈東斜面の麓の荒野に横たわるモノレイクの描写をみると、先にみた山中のレイクタホをめぐる讃

嘆的なトーンとの違いは一目瞭然である。「モノレイクは海抜八〇〇〇フィートのところにあり、生き物がおらず、木も生えておらず、忌まわしい荒野にある。さらにそこから二〇〇〇フィートの高さの、山頂がいつも雪をかぶっている山々に守られている。この仏頂面で静かで船一つない湖［……］は絵のような美しさ（ピクチャレスク）には恵まれていない」（*Roughing It* 265）。

荘厳な山（山中の湖も含めて）の風景と、死と恐怖を連想させる荒野の風景。このような風景観はトウェインだけにみられるのではなく、一九世紀後期の美的基準を踏襲したものにほかならないない。当時の風景画の流行が示すように、アメリカ西部の山々はヨーロッパアルプスを彷彿とさせるピクチャレスクな風景としてとらえられていた一方で、荒野は美的鑑賞の対象にはなっていなかった。その意味では、風景に向けられたトウェインのまなざしはいわば凡庸で紋切り型だったわけだが、一点おもしろい特徴がみられる。それは、風景鑑賞に食べ物が関与しているということである。

たとえば *Roughing It* 第一七章では、ソルトレイクシティで満ち足りた二日間をおくった後、ネヴァダへの旅路を再開する際に半ば沈んだ気持ちを高揚させたのが食べ物であったと語られる。

> The accustomed coach life began again, now, and by mid-night it almost seemed as if we never had been out of our snuggery among the mail sacks at all. We had made one alteration, however. We had provided enough bread, boiled ham and hard boiled eggs to last double the six hundred miles of staging we had still to do.
>
> And it was comfort in those succeeding days to sit up and contemplate the majestic panorama of mountains and valleys spread out below us and eat ham and hard boiled eggs while our spiritual natures reveled alternately in rainbows, thunderstorms, and peerless sunsets. Nothing helps scenery like ham and eggs. (*Roughing It* 140-41)

この一節には、パンとハムと固ゆで卵がたっぷりあるという事実が、周囲の風景を「壮大な」ものに感じる心性と何らかの関係を持つということが示唆されている。ゆで卵は現在の基準に照らせばごくありふれた食べ物だが、鶏卵用のにわとりが安定して飼育されるようになったのが一九世紀半ば以降であることを考えると（Smith 426）、トウェインが西部を旅した一八六一年当時はまだ贅沢品の部類に入る食べ物だったのかもしれない。いずれにせよ、食べ物が風景を引き立てるという点はレイクタホをめぐる記述にもみられ、「温かいパン、焼いたベーコン、ブラックコーヒー」という「すばらしい夕食（デリシャス）」に呼応するかのように、あたりは「かぐわしい（デリシャス）静寂」に包まれていたと描かれたり（*Roughing It* 170）、朝食とパイプで満ち足りた後に朝日に染まる美しい山々に見入る様子が描かれていたりする（*Roughing It* 173-74）。

「風景の引き立て役として、ハムと卵に及ぶものはない」——風景に魅了されるトウェインの傍らにおいしい食べ物があるということ。これはたとえばトウェインと同時代にシエラネヴァダ山脈を縦横に歩き回り、シエラクラブの創設者に

してアメリカ自然保護の父とよばれるジョン・ミューアのような書き手と比べると、奇異に映る。山をめぐるミューアの文章には、風景の神々しさや美しさは微細に描かれているが、食べ物への言及はほとんど見当たらない。実際、ミューアは山での食事に対する関心が薄く、乾燥させてくだいたパンとチーズと少しのお茶があればこと足りたと言われる（Lyon 657）。

トウェインとほぼ同時代に、ミューアはシエラネヴァダとその裾野に広がる荒野をどのように見ていたのか。次の引用は、*Roughing It* 第三八章で描かれるモノレイク周辺と地理的に近いと思われる場所をめぐるミューアの記述である。

> The scenery of all the passes, especially at the head, is of the wildest and grandest description, –lofty peaks massed together and laden around their bases with ice and snow; chains of glacier lakes; cascading streams in endless variety, with glorious views, westward over a sea of rocks and woods, and eastward over strange ashy plains, volcanoes, and the dry, dead-looking ranges of the Great Basin. (Muir 57-58)

この一節をみる限り、ミューアもトウェインと同様、シエラネヴァダの山々の岩と森が織りなす風景を賞賛する一方、グレートベイスンの乾いた荒野は死んだようであると毒突いており、その点で当時の風景観を踏襲していたと考えられる。ただ、ミューアは風景を絵のように眺めるだけではなく、次の一節に明らかなように、生態学的観点から山や森をみる視点も持ち合わせていた。

> But the vegetation of the pass has been in great part destroyed, and the same may be said of all the more accessible passes throughout the range. Immense numbers of starving sheep and cattle have been driven through them into Nevada, trampling the wild gardens and meadows almost out of existence. The lofty walls are untouched by any foot, and the falls sing on unchanged; but the sight of crushed flowers and stripped, bitten bushes goes far toward destroying the charm of wildness. (Muir 66)

牧畜が自然環境に及ぼす影響が風景へのダメージとして語られているが、そこに、後に国立公園運動で重要な役割を果たすことになる生態学的見地から自然環境をとらえる新たな視角の萌芽がうかがえる。さらに、ミューアは自然にはそれ自体に本来備わっている価値があると主張したことでも知られる。山々に向けられたミューアのまなざしは、風景の神々しさに触れて脱人間中心主義を深め、「自然固有の価値」（nature's intrinsic value）へと向けられた。生態学的見地と自然固有の価値への感覚をあわせもったミューアの自然観は、ロマン主義か功利主義かに二分されていたアメリカ環境言説に新たな見方をもたらしたという点で画期的であった。

そのような新しい自然観なるものは、風景をめぐるトウェインの文章にはみられない。ハムとゆで卵を食べながら風景

を見るトウェインのまなざしは、ミューアの場合とは異なり、人と環境との新しい関係が幻視されるような深い思索に結びつくものではなかったようである。しかし、食べながら風景を見るということの身体性は注目すべきことのように思われる。食べるというきわめて身体的な行為は、ミューアが新たな風景観、環境観を熟成させた観念的思索へとトウェインを促すのではなく、あくまで身体的で感覚的な世界にこの書き手をとどめる役割を持っていたと考えられるわけだが、そのことに積極的な意味が見出せるように思えるのである。

身体的かつ感覚的ということで連想されるのは、現代ほど身体や感覚をとおした経験が衰退している時代はないという昨今よくみられる主張である。種の絶滅よりもまず私たちの経験の絶滅が危惧される――そのような見解が国のちがいや専門分野を問わず随所で示されている（たとえば、塩野、ソウルゼンバーグ）。食べ物に関しても同様に、食の問題の背景には食をめぐる経験の衰退があると言われる。食べ物は店で購入するモノ＝商品であり、店頭に並ぶ前のプロセスは見えないし知らないという状況が一般的であることは、説明するまでもないだろう。自分の口に入るものを自分の手で採集したり捕ったり育てたりするという経験はもとより、自分の口に入るものがどこでどうやって作られたのかという知識も欠如している。それに加えて、世代間のつながりが稀薄になり経験の伝達が難しくなってもいる。そういう状況が日本やアメリカのような社会にはある。フードジャーナリストのマイケル・ポーランが言うように、食べてよいものと悪いものを何を基準に判断してよいのかわからないからとりあえず専門家の言うことを聞くという近年の傾向は、経験にもとづく判断が専門家による判断に取って代わられるという大転換の予兆であると言えるだろう（Pollan, *Omnivore's I*）。

ポーランをはじめ、食というテーマに取り組むジャーナリストや教育者や研究者の主張をみると、食べ物の生産、収穫、流通、消費という一連のプロセスを知り、何を食べ何を食べないかを頭だけ（つまり知識詰め込み型）ではなく身体でも（つまり経験的に）判断できるようになることの重要性が強調されている。そのような食をめぐる昨今の議論を追いながら、ふと、風景をたのしむトウェインの傍らに常においしい食べ物があったことがどこか示唆的に思えてくるのである。

2 ■ トウェインの食の風景

食というテーマが環境問題のなかでも現在もっとも高い関心を集めているものの一つであることは間違いない。学校給食改善運動、遺伝子組み換え作物や種子産業の是非をめぐる議論、有機栽培作物への関心の高まり、ファストフードをはじめとする食産業が人や環境や文化にもたらす影響についての議論、そして食をめぐる第三世界と第一世界の関係や経済格差と食卓の問題を「正義」という観点から検証しようとする動きを一例とするように、食の問題はローカルな問題として、グローバルな問題として、あるいはローカルな状況とグローバルな文脈の複雑な交錯において生まれる問題として、多様なアプローチのもとで検討されている。

現在さまざまな分野で食の問題が論じられているが、ポーランによれば、食をめぐるテーマがこのように大きな社会的関心を集めたのは意外にもかなり最近になってからだそうだ。人はいつの時代も食べ物をめぐって争ってきたわけだが、一九七三年を最後に、最近になるまでアメリカ合衆国では食は社会問題にはならなかったという（Pollan, "The Food Movement, Rising"）。その背景には、ニクソン政権時代の農務長官アール・バッツの改革により食料の大量生産と価格低下が奨励され、食物が豊富にしかも安く手に入るようになったということがある。「バッツが農務長官の職についたのは、アメリカの歴史のなかで食料価格の高騰が大きな政治批判を起こした最後の時代だった。食料価格が二度とつり上がらないようにしたこと、それが彼の功績である」（Pollan, *Omnivore's* 51）。ポーランの『雑食動物のジレンマ』や映画『キング・コーン』で描かれているところによれば、補助金の対象となってとくに大量に生産されたトウモロコシは人よりも家畜のえさとして流通し、砂糖に代わる安価な甘味料HFCS（果糖ブドウ糖液糖）として出回り、アメリカ合衆国の食産業を根底から変えていった。大量に生産されるトウモロコシが食用ではなくあくまで加工用であることに象徴されるように、加工品の生産・消費にもとづく現在の食産業が農業従事者、消費者、そして環境にとって問題の多いものだということに人々が気づき始め、食をめぐる問題がふたたび社会問題化したのであった。

何でも食べることができる一方で、何を食べ何を食べるべきでないかを見極める能力を生得的に持たない人間という雑食動物のもつジレンマは、かつては親から子へ、世代から世代へと知恵という名の経験知が受け継がれてゆく過程で緩和されていた。しかし個食／孤食化が進み、食の世代間コミュニケーションが困難になっている現在、経験知の直接的伝承に代わる手だてが求められている。たとえばベストセラーとなったポーランの『雑食動物のジレンマ』が例証しているように、文学にその役割を求めることは可能だろうか。食をめぐるトウェインの言葉の世界にそのような世代間コミュニケーションに代わるはたらきが見出せるかもしれない――そう考えるのは安易にすぎるであろうか。

食と文学とコミュニケーションの問題はAndrew Beahrs著*Twain's Feast*で扱われているので、詳細はそれを参照してもらえばよいが、ざっと紹介するとこういうことだ。トウェインの描く食べ物はモノ（commodity）ではない。食べ物を評価するトウェインの基準が「新鮮、地元産、心のこもった料理、場所の生命との深いつながり」（Fresh. Local. Lovingly prepared. Intimately tied to the life of a place," Beahrs 13）にあったことは明らかで、それは生態学的および文化的な土地とのつながりを重視したものであった。そうビアーズは主張する。これは現在「地産地消」という言葉で表されている価値観と重なるが、それが声高に主張されているのではなく食の描写を根底で支えていることに留意したい。トウェインの食の世界に向き合うことで、現代読者は、この一世紀余の間にいかに急速かつ大規模に食や環境との関係が変化したかとい

うことを考えさせられるのであり、その点がビアーズの議論において静かに強調されているのである。

地元産の新鮮な食べ物への関心というのは、まだ本格的な冷蔵技術も大陸横断鉄道もなかった十九世紀後半はそれが普通だったと考えるのが妥当だろう。*A Tramp Abroad* 第四九章に、ヨーロッパでの食事に辟易したトウェインがアメリカに帰って食べたいものの一例を記したリストがあるが、それをみると、その土地その土地の新鮮な素材を使ったものが多いことがよくわかる。リストの一部を抜き出すと——

Radishes. Baked apples, with cream.
Fried oysters; stewed oysters. Frogs.
American coffee, with real cream.
. . .
San Francisco mussels, steamed.
Oyster soup. Clam soup.
Philadelphia Terapin soup.
Oysters roasted in shell -Northern style.
Soft-shell crabs. Connecticut shad.
Baltimore perch.
Brook trout, from Sierra Nevadas.
Lake trout, from Tahoe.
Sheep-head and croakers, from New Orleans.
Black bass from the Mississippi.
. . . . (*A Tramp Abroad* 574)

ビアーズが指摘していることだが、このリストに載っているものは、トウェインが幼少期に過ごした叔父の農場で食べたものと少なからず重なっていることから、モノとしての食べ物ではなく、土地の記憶、あるいは舌が覚えている土地の記憶と結びついたものだと言える。また、「サンフランシスコのムラサキイガイ」や「シエラネヴァダのカワマス」や「レイクタホのマス」といった土地の名産も記されているが、冷蔵・冷凍運搬技術のない当時、これらはまさにその土地でしか食べることができなかったものだということは容易に想像できる。

ここで強調しておかねばならないのは、トウェインが言及する「土地の食べ物」はある特定の土地に焦点を当てたものではなく、全米各地のさまざまなローカルな場所と関わっているという点である。*A Tramp Abroad* 第四九章の食の一覧表を見ると、南部の料理法への言及が多くあり、またイリノイ、ミズーリ、ボストン、ニューオーリンズ、サンフランシスコ、レイクタホなど具体的な州名や地名も記されているが、それらはいずれもトウェインが実際に訪れて舌で経験した場所にほかならない。土地の食べ物への魅了といっても、ある一つの土地に書き手自身が根を下ろしていたわけではないのだ。その意味で、トウェインが紡ぐ食の世界は、土着性を縦糸に移動性を横糸に織られているとイメージすることができる。

土着と移動の相互関係において立ち現われるトウェインの食の風景は、ローカルとグローバルの対立図式のなかで議論

されることの多い昨今の食の問題に、新しい視角を提供しうるのだろうか。ローカルな食材を丁寧に料理することへの賛美という点では、トウェインは現在のスローフード運動の旗手のような印象すらあるが、しかしそういうローカルな食べ物への愛着はさまざまな土地を移動することなくしてはありえなかったと考えられる。土地への愛着と移動の美学が調合されたトウェインの食の風景を読むことで、ローカルとグローバルのハイブリッドな風景がイメージされてくるとすれば、そこにトウェインの文学的遺産が見出せるのではないだろうか。

〈金沢大学〉

引用・参照文献

Beahrs, Andrew. *Twain's Feast: Searching for America's Lost Foods in the Footsteps of Samuel Clemens*. New York: Penguin, 2010.

Heise, Ursula K. *Sense of Place and Sense of Planet: The Environmental Imagination of the Global*. New York: Oxford UP, 2008.

Lyon, Thomas J. "John Muir." *American Nature Writers* Vol. 2. Ed. John Elder. 2 vols. New York: Charles Scribner's Sons, 1996. 651-69.

McWilliams, James E. *Just Food: Where Locavores Get It Wrong and How We Can Truly Eat Responsibly*. New York: Back Bay, 2009.

Muir, John. *The Mountains of California*. 1894. New York: Penguin, 1993.

Pollan, Michael. *The Omnivore's Dilemma: A Natural History of Four Meals*. New York: Penguin, 2006.

——. "The Food Movement, Rising." *The New York Review of Books* 10 June 2010. <http://www.nybooks.com/articles/archives/2010/jun/10/food-movement-rising/>.

Runte, Alfred. *National Parks: The American Experience*. Third ed. Lincoln: U of Nebraska P, 1997.

Shein, Debra. "The Imperiled Jumping Frog of Calaveras County (Dan'l was a *Rana aurora draytonii*-no bull)." *ISLE* 16.2 (2009): 245-63.

Smith, Andrew F. *The Oxford Encyclopedia of Food and Drink in America*. 2 vols. New York: Oxford UP, 2004.

Twain, Mark. *Roughing It*. 1872. Ed. Shelley Fisher Fishkin. New York: Oxford UP, 1996.

——. *A Tramp Abroad*. 1880. Ed. Shelley Fisher Fishkin. New York: Oxford UP, 1996.

塩野米松『失われた手仕事の思想』二〇〇一、中公文庫、二〇〇八。

武藤脩二、入子文子編著『視覚のアメリカン・ルネサンス』世界思想社、二〇〇六。

ソウルゼンバーグ、ウィリアム『捕食者なき世界』野中香方子訳、文藝春秋、二〇一〇。